

観音菩薩の宗教

④

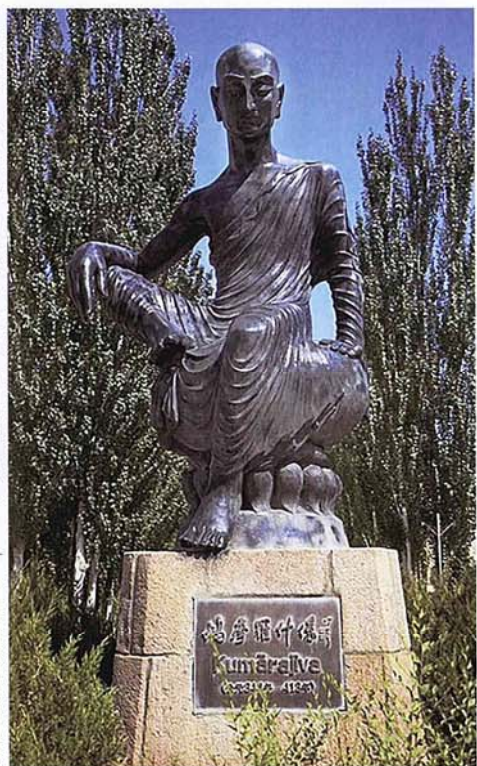
国際教養大学特任教授 金岡秀郎

観音菩薩の名称

今回は「観音」すなわち「音を観る」とはどういうことを考察した。今回は観音菩薩の名称について論じてみたい。

「観音様」というように、日本を含め漢文仏教圏では「観音菩薩」の名称がもつともよく知られている。しかしこの菩薩には「観自在菩薩」や「観世音菩薩」の呼称も伝わっている。広く知られることはなかったが、「光世音」とされたこともあった。こうした違いはいかなる理由で生じたのであろうか。

最初に「観世音菩薩」を見てみよう。観世音菩薩の名前は、鳩摩羅什が漢訳した『妙法蓮華経』の人名によって弘まった。なかでも『妙法



新疆ウイグル自治区クチャ県のキジル千仏洞に1994年に建立された鳩摩羅什の銅像

蓮華経』の第二十五章となる「観世音菩薩普門品」は別名「観音経」ともいわれ、観音信仰に大きな役割を果たしてきた。鳩摩羅什は四世紀中頃の西域、いわゆるシルクロードにあつた亀茲國(クチャ)に生まれたインド人で、本名をクマラージヴァという。鳩摩羅什はその漢字音写である。若い頃から仏教を中心にあらゆる学問に精通していたが、亀茲國を攻めた呂光によって前秦の姑臧に連れて来られた。姑臧はさまざまな言語が語られた「語学習得に便利な」土地で、鳩摩羅什はそこに十六年留まつて漢語を習得したと推定されている(鎌田茂雄『中国仏教史』第二巻

東京大学出版会)。その後、四〇一年、鳩摩羅什は後秦の姚興によつて都の長安に迎えられ、そこで『妙法蓮華経』ほか多くの仏典を漢文に翻訳した。当時の中国北部は五胡十六国時代と呼ばれ、漢族のみならず後のモンゴル人やチベット人に連なるさまざまな民族が中国を分割していた時代である。前秦も後秦もそうした国のひとつであった。この時代、西域にはインド人の進出したオアシス都市国家が点在しており、

五胡十六国諸国はそうした国々からインド文化を吸収した。当時、前秦や後秦は南の漢族から「胡」すなわち野蛮人と呼ばれ蔑視されていた。漢族にとつて野蛮か否かの規準は儒教を中心とした教養の有無である。そうした格差を挽回するため、胡の人々は儒教以外の教養であった仏教を、同じく胡と見做されたインドから積極的に導入した。いわば胡の漢に対する理論武装である。鳩摩羅什の訳経活動にはそう

した民族的な背景があつたと筆者は考えている。漢訳仏典の歴史では、鳩摩羅什までの翻訳を「旧訳」とし、七世紀の唐の玄奘以降の翻訳を「新訳」と区分する。玄奘は原文のサンスクリット語に忠実な翻訳を心がけ、それまでの旧訳を「訛謬なりすなわち「訛つていて謬り」であるとか「遺漏がある」と批判した。玄奘の訳経における多大な貢献と影響力から、旧訳は誤訳が多く、ただ文章として流麗なだけであるとする偏

見が生まれたが、果たしてそれは事実であろうか。鳩摩羅什の翻訳が流麗であることは、「色即是空・空即是色」とか「念彼観音力」などの唱えやすい訳文が彼の創出とされることから賛同されやすい。しかしその訳文が訛謬であるかという点、再考の要がある。鳩摩羅什には僧肇などの漢人の弟子が手助けしたとはいえ、仏教に精通し、漢語に熟達していたことは否定しがたいからである。観世音菩薩と観自在菩薩は、鳩摩羅什と玄奘の漢語への訳し分けによつて生じた相違であつた。すなわち、鳩摩羅什が「観世音」と訳したものを謬りとして「観自在」と改訳したのが玄奘である。玄奘は、サンスクリット語の菩薩名の「アヴァローキテーシュヴァラ」を「観」と訳し得る「アヴァローキタ」と、「自在にできるひと」を意味する「イシュヴァラ」に分析して翻訳した。かくて

「観自在」が訳出された。「観自在」は「自由自在に観ることのできる者」の意である。確かに、このサンスクリット語から解釈すると「観世音」の訳語は出て来にくく、鳩摩羅什の翻訳に批判が出るのもやむを得ない。しかし、西域すなわち中央アジアで発見されたサンスクリット語の『法華経』には、アヴァローキタスヴァラという菩薩名が出ていることが知られている。アヴァローキタは先述のごとく「観る」であり、またアヴァローキタに含まれるローカは「世間」、スヴァラは「音」を意味するから、これを翻訳すると「世間の声を観る」という意味で「観世音」となる。

先述のごとく、鳩摩羅什は西域の人であつた。もし彼がアヴァローキテーシュヴァラではなくアヴァローキタスヴァラにもとづいて漢訳したとしても、その訳語は誤訳ではなく、原語に忠実であつたことになる。中央アジア出土の『法華経』は六世紀ごろの成立と推測されているが、それ以前の観音の古形を保存している可能性も指摘されており(田中公明『仏教図像学』春秋社)、五世紀初頭に活躍した鳩摩羅什がそうしたサンスクリット語から漢訳したことも否定できない。鳩摩羅什は「観世音菩薩は即時に其の音声を観じて」という原文にはない文を加えているから、その意味を考えた上での翻訳ということも窺知できる。

なお観音という呼称は、観世音の略称とも、唐の二代皇帝・太宗の本名である李世民に対する避諱から生まれたとも言われている。避諱とは高位の者の実名を遠慮して避けることである。鳩摩羅什の漢訳が旧訳とされることはすでに述べたが、それよりさらに古い漢訳は古訳といわ

れる。古訳に属する『法華経』が漢訳した『正法華経』では、観音は「光自在」と訳されている。また、「世自在」を意味するローケーシュヴァラという菩薩がさまざまなサンスクリット語の文献で観音菩薩と同義とされている(佐久間留理子『インド密教の観自在研究』山喜房)。こうした呼称の多様性は、観音信仰の時代的・地域的な広がりを反映したものとさええるだろう。

院内散歩 15

薬王院の展示物



木版画『紫陽花咲く大本坊への道』 作・井堂雅夫